
あなたの願い叶えましょう

初心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの願い叶えましょう

【Nコード】

N19330

【作者名】

初心者

【あらすじ】

この世に偶然なんてないあるのは必然だけ

必然の中であつた人たちは侑子になにを願う？

メインの登場人物（前書き）

キャラ崩壊があるかと思いますが暖かく見守ってください

メインの登場人物

壱原侑子

願いを叶える代わりに同等の対価を支払わなければならないミセの主。

次元の魔女、極東の魔女と呼ばれている。

人の運命を変えるほどの強大な魔力を持っている

偽名である

口癖

この世に偶然なんてないあるのは必然だけ

四月一日君尋

あやかしが見える少年

料理がうまい

モコナ

モコナⅡモドキ

侑子とクロウがつくった。

色は黒

マル、モロ

侑子を主様とよぶ少女

魂がないのでミセから出られない。

ちなみに名前はマルがマルダシ、モロがモロダシ。

一話

「四月一日、四月一日」

「なんですか侑子さん」

「お酒、それとおつまみをよろしくー」

「俺今掃除中なんすよ」

「いいから持ってきてなさい」

「はいはい」

「はいは一回でよろしい」

「はいい」

チリン

「どうやら誰かきたみたいね四月一日お連れして」

四月一日と呼ばれる男はお客を迎えに行った。

「名前は？」

「三上佐織です」

「ここにこられたことはあなたに何か願いがあるからよ」

「願いを叶えてくれるんですか？」

「ええ対価さえ払ってくれば何でも」

「お願いです助けてください」

「この出会いも必然いいでしょう、あなたの願い叶えましょう」

「実は・・・」少女は語り出した。

「私には友達がいるんです。」

その友達が先日好きな人に告白しました。

けどフラれました。

その人は私の彼氏なんです。

それで友達が私の彼氏が許せなくてあるサイトにつないだんです。」

「それは――」

侑子さんが聞く。

「地獄通信です」

「へえ――」

「友達は地獄少女から藁人形を貰いました。」

彼を地獄に落とすみたいです。」

「そう」

「お願いです彼を助けてください」

「無理よ」

「えっ？」

「あなたは彼を地獄から救い出してと言っている」

「はい」

「はっきり言っわ対価が重すぎる」

「無理なんですか？」

「その方法は無理よ」

「ほかに方法があるんですか？」

「ええあるわよ」

「教えてください」

「それは……………」

「えっ？」

「そう、それしか彼は救えない」

「そうすれば彼は助かるんですね」

「ええ明日から必ずしなさい」

「わかりました」

「対価はあなたのその心よ、そして手紙を書きなさい……宛に……のことばを」

「わかりました」

「四月一日、彼女をお送りして」

「はい」

四月一日は彼女をミセの外へだした。

「ありがとうございました」

彼女はさつていった。

「侑子さんそれしかなかったんですか？」

「ええ彼女の対価に見合う情報はね」

「残酷すぎます」

「けれど彼女はやり遂げる」

「そっそんな」

「決めたのは彼女、実行するのも彼女、実行しないのも彼女」

「・・・・・・」

四月一日は彼女に訪れる不幸に悲しんだ。

次の日彼女の学校

「佐織、一緒にご飯食べよ」

「嫌よ」

「なんで？」

「あなたといるとムカつくんだけど」

佐織は教室に響くように言った。

「ちよっちよっとうしたの佐織？」

香奈が手を伸ばす。

ペシッ

すかさず佐織は手ではたく。

「私にさわらないで」

佐織は教室の外に弁当を持って去っていった。

（どうしてあんなことするの？）

「香奈、なにかあった？」

「私もわからない」

香奈は呆然としていた。

放課後

「佐織帰ろ」

「あなと帰る訳ないじゃない」

佐織は私を置いてさってしまった。

（どうして・・・私がなにをしたのよ）

香奈の中に怒りが沸いてきた。

次の日

佐織の変化は変わらなかった。

「やめてよ私に近づかないで」

「なんでなのよ私になにかしたの？」

「したからよ」

「なにをしたのよ」

「ふんっ自分で考えてみたら？」

香奈には全く検討がつかなかった。

深夜0時

「許さない、三上佐織」

マウスのクリックを押した。

すると前と同じ夕方の木のしたに来た。

私の前に地獄少女がいた。

「あの子も地獄に落としてよ」

「できないわ」

「なんでよ」

「落とせるのは一人に一人だけ二人はできない」

「じゃっじゃあ最初のをやめて新しいのにするわ」

「わかった、それならその赤い糸を引きなさい引いたらその相手は速やかに地獄に流されるわ」

「そして私も代償よね」

「そう、あなたにも代償を払って貰う、あなたの魂も地獄へ流される、死んだ後の話だけどね」

すると部屋に戻った。

「あとはあなたが決めることよ」

地獄少女がささやいた。

次の日

香奈は決定的な光景を見た。

それは佐織が彼と歩いていた。

私は二人の前に立ちはだかった。

「そういうことだったのね」

「そうよ彼は私の彼氏なの」

「私にひどく当たったのも」

「そうよ」

香奈は鞆から藁人形をだした。

「脅しのつもり？」

「そうよ、私はあなたを許さない」

「引いてみなさいよ」

私の決意は固まった。

「地獄へ堕ちろ」

糸が引かれた。

「恨み聞き届けたり」

藁人形が忽然と消えたと同時に佐織が消滅した。

「ハハハッハハハ」

佐織の部屋では一人の女性がいた。

「対価は受け取ったわ佐織さん」

そして机の上にある手紙を取った。

「これは渡るべき人に」

佐織は一人の少女と相対した。

「闇に惑いし哀れな影よ人を傷つけ貶めて罪に溺れし業の魂、イツペン、死んでみる」

着物が開かれた。

気が付くと佐織は船の上にいた。

「地獄少女さん、ありがとう」

「えっ？」

地獄少女は困惑していた。

「この地獄流しは仕組まれたのよ」

「誰に？」

「私よ」

「そう、この恨み地獄へ流します」

チリン

次の日

香奈の家に手紙が届いた。

その手紙には佐織からの謝罪の言葉が綴られていた。

最後の字は

「最愛なる親友香奈へ」

と書かれていた。

この日もう一人の少女がこの世から消えた。

「侑子さんこれでよかったんですよね」

「終わりは残酷でも彼女の願いは叶えた」

「そうですね」

「あるとき私は彼への恨みの矛先を彼女へ変えることを言ったわ」

「それしかなかったんですよね」

「ええ高校生の彼女に払える対価に見合っているわ」

「わかりました」

「それより四月一日、お酒マダア？」

「もう待ってくださいよ」

この日もこのミセはふつうの日になっていた。

「あなたの恨み晴らします」

一話（後書き）

今回は地獄少女編でした。

二話（前書き）

完全におかしいかも

二話

「四月一日、しがつついたちと書いて四月一日」

「またそれかよ、いったいいつのネタだ？」

今日も四月一日とモコナの漫才みたいな会話を聞いていた。

スッ

「誰か来たみたいね」

四月一日が入り口に行くとそこには高そうな服を着て銀髪の髪の毛、腰に刀を二つつけ腕に少女を抱いた青年が立っていた。

「名前は？」

「殺生丸だ」

「あなたの願いは？」

殺生丸と呼ばれる青年は抱いていた少女を降ろした。

「この子を救ってほしい」

「そう病気なのね？それもなにかの毒に犯されている」

「………救えるのか？」

「ええ対価さえ払ってくれば何でも」

「なにを払えばいい？」

「それはあなたの血よ」

「・・・・・・」

「あなたが血を提供したらこの子を助けましょう」

「わかった」

「四月一日、ナイフと小瓶」

「あつはい」

四月一日は小さな瓶とナイフを持ってきた。

「それじゃあこのナイフで切って血を瓶に入れなさい」

殺生丸は渡されたナイフで腕に切れ目をいれ血を出した。

血は腕を伝い瓶の中へ落ちていった。

「いいわ」

瓶を殺生丸から受け取り栓をした。

「この子をここに寝かせなさい」

殺生丸は言われた場所に少女を降ろした。

すると少女のまわりに魔法陣が展開した。

「少女を蝕む毒よ新たな宿主へ向かいなさい」

すると少女の口から毒の煙が出てきた。

「うわっ」

四月一日は驚いて尻餅をついた。

「……………」

殺生丸はただ見ていた。

侑子は先ほどの瓶の栓をあけた。

「これが宿主よ」

毒の煙は瓶の中へ自ら入り込んでいった。

毒の煙が瓶の中にすべて入った後侑子は栓をして魔法で封印を施した。

「もう大丈夫よ」

すると少女がゆっくりと目を開けた。

「殺生丸さま？」

「大丈夫か？」

「はい」

少女は笑顔で答えた。

殺生丸は侑子をみた。

口には出さないがまるで感謝を表しているようだった。

殺生丸は少女を抱きどこかへと飛んでいった。

「四月一日、お酒」

「あー終わったらすぐそれですか？」

「そうよ」

それから四月一日の説教は長く続いた。

三話

「フー」

煙管の煙が部屋に広がる。

「できましたよー」

四月一日が何かを持ってくる。

「待ってましたー」

それはプリンだった。

プルン

パクッ

「んーおいしい、さすが四月一日ね」

「いやーそれほども」

四月一日は照れていた。

「四月一日おかわり」

「おい少しは味わって食べよ」

四月一日はモコナに怒る。

「「あはは、四月一日が怒ったあ」「

マルとモロがおもしろがっていた。

侑子がプリンを食べ終わった頃、ミセの扉が開いた。

「どうやらお客のようね」

お客が中に通される。

「名前は？」

「江戸川コナンです」

「ふーん、願いは？」

「わかんない、気がついたら足が勝手にここにきたの」

「ここには願いがある人しか入れない、ということはあなたには何か願いがあるということ」

「僕、難しくてわかんない」

「演技はしなくていいのよ」

侑子は語りかける。

「えっ？」

「私はあなたが本当は高校生だと知っている」

コナンの表情が変わっていく。

「なぜ知っている？」

コナンの口調が変わった。

「知りたい？」

「………ああ」

「四月一日」

「はい」

「鏡を」

侑子は四月一日に鏡を準備させた。

「ごらんなさい」

鏡にはコナンの顔が写し出されていた。

「鏡よその者の真実を写せ」

鏡が輝き出す。

輝きが元に戻るとそこにはコナンは写っていなかった。

「こっこれは・・・」

「これが本当のあなた・・・」

鏡にはまるでコナンが成長したような人物が写っていた。

「ぐっ偶然か？」

「この世に偶然なんてないあるのは必然だけ」

「必然」

「対価をもらうわよ、その蝶ネクタイをもらうわね」

侑子が指を動かすと蝶ネクタイが勝手にはずれ侑子の手に吸い込まれるように飛んでいった。

「あなたの本当の願いは？」

「元に戻りたい」

「いいでしょう、でも高いわよ」

「なっなにを・・・」

「それはあなたの記憶を・・・」

「俺の・・・記憶」

「そう、あなたの小さくなつてからの記憶を対価にすればあなたを

元の姿に戻しましょう」

コナンの顔が陰しくなる。

「できない」

「いいの？それで」

「俺はあいつらと過ごした日々を忘れたくない」

「そう」

侑子は立ち上がった。

「選択はなされた、歩み続けなさい、それがあなたの宿命なのだから」

ヒュー

風が吹いた。

気がつく入り口らしきところに立っていた。

「ここは・・・」

コナンの目にはただの空き地に見えてしまっていた。

「フツこうなることも必然か」

蝶ネクタイを失ったコナンは駆け出し阿笠邸に向かった。

「彼はいつか元に戻る、それを決めるのは彼自身」

「そうなんですか？」

「そうよ、彼はもうここにはこない」

「・・・」

「と言うわけでお腹空いたわご飯まだあ？」

「あー今から作りますよ」

ミセはいつもの風景だった。

三話（後書き）

見ていただいてありがとうございます。

そろそろネタが尽きそうです。

出させてみたいキャラがいっぱいありました是非教えてください。

あとはそのキャラの特徴と願いもお願いします。

キャラ崩壊するかもですが。

四話

侑子に相對するのはトンガリ頭の少年だった。

「名前は？」

「アテム」

「封印されし名も無きファラオの魂」

「なぜ知っている？」

「名前には力がある、それは時に人のすべてを語る」

「俺はなぜここにいる？」

「それはあなたに願いがあるから、この店は願いを叶えるお店、私に叶えられるのなんなんでも」

「願い」

「そう、時に願いは人を動かす」

「俺は相棒にあいたい」

「あなたの友人、家族、大切な人」

「叶えられるのか？」

「対価さえ払ってくれば」

「あえるのなら何でも払う頼む」

侑子は笑みを浮かべた。

「その願い叶えましょう」

アテムが光に包まれどこかへと消えた、残されたのは一つのピース。

「これはなんですか？」

四月一日が尋ねる。

「これは彼のいままでの記憶、十分な対価よ」

「彼はどこに？」

「記憶の最初から・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ひとりの少年が倒れていた。

彼は誰かに殴られ倒されていたのだ。

彼の手にはパズルのピースがあって目の前に完成間近のパズルがあった。

（友達がほしい）

彼はこころの中で叫びパズルの最後のピースをはめた。

するとパズルが光り出した。

その光はあたりが昼のように明るくなっていた。

少年を倒した男にその少年は言った。

「さあゲームの時間だ」

彼の首にはピラミッドを逆さにしたようなパズルの完成形が吊されていた。

五話

「名前は？」

「竜崎と呼んでください」

男はそう答えた。

それにしてもこの男性の座り方はまさに個性的だった。

「偽名ね」

「バレました？」

「わかるわ」

「なら私がここにいる理由も知っていますね」

「ええ、それは必然だから」

「必然？」

「そう、偶然ではなく必然、あなたがノートを見つけるのも書かれたのも必然」

「私が死んだことも必然だと？」

「そうよ、そしてあなたは願いがある私はその願いを叶えるためにいる」

「甘いものが欲しいです」

「・・・・・・・・」

「嘘です。すみません」

「死んだものは生き返らない」

「・・・・・・・・」

「けれど繋ぐことはできる、意志を」

「私は、次のLの候補者にキラに倒されて欲しくありません」

「つまり倒されなければいいのね？」

「はい」

「対価は・・・・・・・・」

「私が渡せる対価は・・・名前ぐらいですか」

「そうよ、名前は時として自らを守り、誰かを護る」

「わかりました、渡しましょう私の本名を」

「言っておくけど護れるのは一人だけよ」

「名前は一人の人間に一つしかないからですね」

「そう、護れない人間もいる」

「残念です」

「対価をもらうわね、名乗りなさいあなたの本名を……」

「L Lawlite」

「正義、あなたの願い叶えましょう」

魔法陣が現れそこに本名が吸い込まれる。

「名前よ、今、護りとなつて継ぎしものを守護せよ」

.....

二人の明暗が分かれた。

一人は勝つために命を落とす。

もう一人は一人がもたらした結果によって勝利した。

「二人ならしに並べる、二人ならしを超える」

護られた男、ニアは高らかに宣言した。

.....

「あなたの願いは叶えたわ」

「一つ聞いていいですか？」

「なにを？」

「あなたは本名を書かれたら死んでしまいますか？」

「死なないわ、なぜなら眼には私の寿命も本名も映らないから」

「ありがとうございました」

竜崎の魂は天に昇っていった。

（時が止まった私にはDEATH NOTEは効かない）

侑子は空を見上げてその魔法をかけたものを思い出していた。

「クロウ……」

六話

四月一日は啞然とした顔をしていた。

「いらつしゃい」

「えっとおじやます」

その少年？は店に入ってきた。

マルとモロは

「みどり、みどり、みどりいろ」

などと歌っていた。

あながち間違いではないこの少年？いやいや未確認生物は体中が緑色をしていておでこあたりに触覚があったのだ。

「名前は……」

「あっはい、デンドデです」

「デンドデ……そう」

侑子はなにかに気づいたようだった。

「ここは願いを叶えるお店、対価さえ払えばなんでも私にできる」となら

「願いですか？」

「そうよ、この店は願いがある者だけが入れのお店、そしてあなたがここに來たのも必然」

「必然、そうかもしれません」

「あなたの願い聞きましょう」

デンドという少年は願いを言った。

「ドラゴンボールを探してくれませんか？」

「ドラゴンボール？」

四月一日がさっぱりみたいな顔をした。

「探してどうするの？」

「えっ？それは……」

「願いを叶える為ね」

侑子はスラリと言った。

「はっはい」

「侑子さん知っているんですか？」

「ええ願いを叶える球、しかも無料で」

「なんでもですか？」

「創造主の力を越えない限りはなんでも」

「探してくれますか？」

「あなたはドラゴンボールの恐ろしい伝説を知っている？」

「恐ろしい伝説？」

デンドは全く知らないようだった。

「知りたい？」

「はい」

「対価さえ払えば教えてあげる」

「わかりました、なにを払えばいいですか？」

「あなたの周りが見える力、誰が、どこで、なにをしているのかを知る力」

「わかりました払います」

「いいわ、聞かせてあげる」

侑子は話し始めた。

「ドラゴンボール、それは7つのあるボールをあつめあるキーワードを言つて現れた者に願いを叶えて貰う道具。」

願いは対価は払う必要がなく死んだ者までよみがえらせることのできる夢の道具。

けれど対価は願いをかけた者が払う訳じゃない。

払っているのはドラゴンボールだから。」

「ドラゴンボールが対価を払う？」

デンドは全く知らないようだった。

「そう、ドラゴンボールはいわば天秤に乗せられたおもりと同じ。

ドラゴンボールは一つの願いを叶えたら百年休ませなければならぬい。

でも一年経てば使える。

ドラゴンボールはプラスの力、願いはマイナスの力。

天秤に乗せられたおもりが反対に乗せられたおもりには負けるとどうなる？

当然マイナスになる。

ドラゴンボールは願いを叶える対価にマイナスの力をボールに溜め

る。

そして連続で使うと当然マイナスが強くなりプラスは無くなる。

マイナスには意味がある。

光の反対は闇、天の反対は地。

この場合は光と闇が答えに近い。

光はなくなり闇になる。

ドラゴンボールを使うと闇が増えるのよ。

闇が増えるかどうかしら？」

「破壊と崩壊と滅び」

デンデは震えながらも答えた。

「この場合は破壊と滅びよ。」

マイナスの力を溜めたドラゴンボールは破壊と滅びを招き災いをもたらす。

それでもあなたはドラゴンボールを探して欲しいの？」

「えっ？あつえつとやめます」

「賢明な判断ね、願いは対価なしには叶えられない払う者は誰でも

いいと考えるのはよくないわよ」

「しっ失礼しました」

デンドは飛び出していった。

「あんなこと言って良かったんですか？あんなに怖がってた」

「彼は早くに気づくべきだった」

「えっ？」

「もう手遅れだからよ」

とある世界でヒビの入ったボールに少年は言った。

「いでよ神龍」

空は暗くなりマイナスの力があふれ出した。

それはもつとも邪悪でもつとも凶悪な存在が現れた瞬間でもあった。

「あとはあなたが努力しなさい」

侑子はそらに向かっていった。

六話（後書き）

あつて
るかな？

七話（前書き）

最後の投稿です。

運命を変えることは難しい。

だがそれを変えることができる方法があるとしたら・・・。

七話

一人の男が身体を貫かれた。

男の炎の身体を焼いたのはマグマの身体の男だった。

男はもはや虫の息だった。

男の親父でもある男、エドワードニューゲート、通称白ひげは息子の死を悟った。

（すまないエース……助けられなくて……）

彼は涙する。

こんなに犠牲を出しながら救えなかった息子エース……。

「彼はまだ助かるわ……」

戦場だというのに場違いな女性の声がした。

声の主の方を向く。

その女性は明らかに戦場では動きにくい服装をしていた。

なぜかはわからない女性の声がよく聞こえる。

気づいたら周りの時間がまるで止まっているようにみんなは彼と女性以外動いていなかった。

「助かるだと？俺は数多くの戦場を生きてきた、そして数多くの者達の死を見てきた、それでも助かるのか？」

彼は女性に問いかける。

「ええあなたが願って私に対価さえ払ってくれば、ただし放っておけば彼は必ず死ぬわ」

女性は彼に答えをいう。

「わかった息子を助けてくれ」

彼は女性に願う。

「あなたの願い叶えましょう」

女性はまるで彼が願うことが解っていたようだった。

「あなたが払う対価は・・・・・・・・・・・・・・・・・・よ」

女性は彼に対価を求める。

「グラララララ・・・それくらいくれてやる」

彼は笑って承諾した。

女性は歩きだし死ぬ寸前の彼の前まで行き手をかざす。

不思議なことに見る見るうちに彼の傷口が塞ぎ元の状態に戻った。

治療を終えた女性は願った者のもとへ向かい。

「対価をいただくわ……」

と言った。

時は動きだしエースが立ち上がる。

「生きてる、傷もふさがっている」

エースは驚いていた。

「エース……」

ルフィの体力はもう限界だった。

「いくぞ」

エースはルフィを担ぎ走り出す。

「白ひげ……」

センゴクは驚きの表情をしていた。

「グララララ……」

白ひげは笑っていた。

「なんだこの傷は!？」

センゴクは白ひげについた傷を見て言った。

「この傷は未来への傷だ……この世界に存在するすべての海賊は求める……宝を……地位を……そして半ばに散った海賊たち……共通するのはみなワンピースを求めている……かつてそれを手にした海賊はすべてを手に入れた……いつかまたその海賊と同じようにそれを手にする海賊が現れる……そのとき世界は再び混乱に陥るだろう……覚悟するがいい……」

白ひげの言葉を聞いていたのか聞いていなかったのかは謎だったが彼が語っているときはすべてのものが黙って動きを止めていた。

「……オヤジイイ」

彼の息子たちは叫んでいた。

「ワンピースは実在する」

白ひげはすべての者に聞こえる声で宣言した。

「白ひげえええ」

センゴクは白ひげに向かって怒鳴った。

しかし白ひげは返事をしなかった。

白ひげはもはや息をしていなかった。

彼の近くに集まった海兵たちはみな腰を抜かしていた。

彼の身体は何者かによって貫かれていた。

それはエースの身体に空けられた穴よりさらに大きい巨大な穴だった。

その周りには彼の血が広がっていた。

それは白ひげの息子たちには全く見えなかった。

白ひげのマントが邪魔をしていて見ることは叶わなかった。

時は少し戻り。

「彼の致命傷をあなたがもらいなさい、それもあなたの身体に合わせて」

女性 は白ひげに言った。

「グラララララ……それくらいくれてやる」

それは誰も知らない、そして知ることできないものであった。

八話（前書き）

適当に作ってしまった。

希望があればその話をやりたいと思っています。

八話

「めずらしいお客が来たわね」

侑子がそう言ったとき店の庭にまるで砕けたような宝石が一つ落ちてきた。

「四月一日、それを壊さないようにここに持ってきて」

「なんですかこれ？」

「それは魂よ」

それを聞いた四月一日は侑子に渡す。

「砕けた魂のかけらよ、また一つとなっていてよ」

するとかけらが浮かび上がり空から光が射しそこから似たようなかけらが飛来して一カ所に集まった。

きれいな宝石が完成した。

「いらつしゃい」

宝石が紅く輝き人型になった。

「ここはどこだ？」

見るからに中学生くらいの少女が立っていた。

「ここはお店よ」

「お店？」

「願いを叶える店」

「本当に叶えるのか？」

「対価さえ払ってくればなんでも」

少女の顔が疑惑の表情だ。

「わかった私の願いを叶えてくれよ」

「願いは……」

「さやかを助けてくれ」

少女は突然言った。

「その子の名前は？」

「美樹さやかだ」

「無理よ」

「なぜ？」

少女の顔が怒りにゆがむ。

「彼女はすでに死んでいるわ、死んだ人間を生き返らせることはできない」

侑子は諭すように告げた。

「肉体は無事なんだせめて魂だけでも助けてくれ」

「魂だけでいいのね？」

「あああいつのソウルジエムさえあれば助けれる」

「私は手伝っただけよ、あとはあなたがやるの」

「どうすればいい？」

「探しなさい、彼女の魂を」

「はあ？」

「言ったでしょ一度私はあなたの魂を直した、その対価を考えると私ができるのはあなたを導くことだけ、そして手に入れたさやかの魂を修復するだけ」

「私に自力で探させるのか？」

「違うわ、今からあなたを4つの時間軸へとばす、そこにいる美樹さやかからソウルジエムを少しもらっただけよ。この宝石を当てるだけで回収できるわ」

「わかった、でなにを差し出せばいい？」

「美樹さやかはあなたにとって大切な人なのかしら？」

「・・・・・・・・ああ」

「ならあなたの大切な人を対価にさせてもらうわ」

「まさか・・・・・・・・」

「すべての時間軸にいるあなたの父親を対価にさせてもらうわ」

「・・・・・・・・そうかい、あれは・・・・私が願ったから失ったんだな」

「言うておくけど4つの時間軸にはあなたもいるからね、そしてもう一人時間を操る少女も・・・・・・・・」

侑子が手をかざすと少女の周りに魔法陣が浮かび上がり少女が消えた。

「魔法少女、佐倉杏子・・・・そして美樹さやか、フッフ」

侑子の手には一冊のマンガがあつた。

「こんな世界もあるのね・・・・魔女の世界、インキュベーター、因果の集結、そして鹿目まどか」

侑子はマンガを開いて読み始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933o/>

あなたの願い叶えましょう

2011年10月7日01時18分発行